

一般演題

[O4]エンド・オブ・ライフケア

座長:長岡 孝典(独立行政法人国立病院機構 呉医療センター)

2022年6月11日(土) 13:50 ~ 15:00 第4会場 (国際会議場 21会議室)

13:50 ~ 14:02

[O4-01]新人救急看護師のエンド・オブ・ライフケアに対する困難感—6名の面接調査結果より

○松本 蘭¹、城丸 瑞恵² (1. 札幌市病院局 市立札幌病院 救命救急センター、2. 札幌医科大学 保健医療学部看護学科)

キーワード：エンド・オブ・ライフケア、困難感、新人看護師、救急看護師、2年目

【目的】救急看護師は、生命の危機的状況にある患者及び家族を看護の対象とし、救命困難な患者及び家族に対し、最期までその人らしい生と死を支えるエンド・オブ・ライフケアを実践している。このような実践の中で救急看護師はエンド・オブ・ライフケアに困難を感じ、その内容は環境・時間の制約・代理意思決定の場面などである(高野、2003/宮岡・宇都宮、2018)と明らかにされている。一方、新人救急看護師がエンド・オブ・ライフケアを行う際に抱く困難感は、これまで明らかにされていない。他領域の新人看護師は、エンド・オブ・ライフケアにおいて経験不足に伴う実践への困難感を抱え(小池他、2012)ており、新人救急看護師も同様の可能性がある。そこで本研究は、新人救急看護師への教育や支援の一助となるよう、成人期以降にある患者とその家族に対して新人救急看護師がエンド・オブ・ライフケアを行う際に抱く困難感を明らかにする。

【方法】質的記述的研究。調査期間は2019年12月～2020年2月である。看護基礎教育機関を卒業後すぐに救命救急センター設置施設に就職し、1年目の4月から調査時まで継続して救急患者の集中治療に携わる2年目救急看護師を対象とした。エンド・オブ・ライフケアを行う際に抱く困難を感じた経験の有無とその内容について半構造化面接を行った。逐語録を意味のあるまとまりごとに文章・文節で区切り要約し、相違性と類似性に留意しながらサブカテゴリー・カテゴリーを生成した。分析は質的研究者のスーパーバイズを受けた。所属大学倫理委員会の承認を得て実施した。研究協力者には、研究目的、自由意志の尊重、個人情報保護等を文書を用いて口頭で説明し、同意後に面接を実施した。

【結果】研究対象者は4施設6名の看護師で、平均年齢23.2歳、看護師経験年数は1年9ヶ月が1名、1年10ヶ月が3名、1年11ヶ月が2名であった。面接時間は平均41.5分であった。分析の結果、92コード、16サブカテゴリーから5カテゴリーが抽出された。文中の【 】はカテゴリーを示す。【救命から看取りへの方向転換に自分を沿わせることの難しさ】では、救命困難と判断され、看取りへと方針が転換した時から臨終を迎えるまでの過程で、様々な現実に関心を抱くことができずにいた。【苦痛を伴う治療方針への割り切れなさ】では、患者に行われている苦痛を伴う治療方針に対し、気にかかることや割り切ることのできない思いを抱いていた。【患者に対応する際の自分自身の判断と技術への悩み】では、病状が変化していく患者への対応を行うことが精一杯で、患者の状況に適した判断の難しさや実践することに対し、悩みを抱いていた。【先輩看護師の言動に抱く苦悩】では、先輩看護師の態度や振る舞いに対し、研究協力者自身の考えや思いなどの大切にしたいこととの間に食い違いを感じ、持って行き所のない思いや解決する方法が見出せないことに思い悩んでいた。【患者と家族が死への過程でどのように時を過ごしたいのかの考え、援助することの難しさ】では、亡くなるその時まで患者と家族がどのように時を過ごしたいかを考えて援助することに戸惑い、悩んでいた。

【考察】研究協力者は、患者の治療方針が救命から看取りへの転換に対し、受け入れ難さがあることが明らかになった。また、自分の行為をきっかけに患者の病状が悪化する事が怖いと感じ、患者の状況に適した判断や実践をすることに悩んでいた事が伺えた。新人救急看護師の知識と臨床で起きていることを関連させて意味づけするなどの新人救急看護師の経験知を蓄積するための支援が必要であると考えられる。